

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載

【部門区分】第 3 部門第 2 区分

【発行日】平成28年8月18日 (2016.8.18)

【公開番号】特開2015-10043(P2015-10043A)

【公開日】平成27年1月19日 (2015.1.19)

【年通号数】公開・登録公報2015-004

【出願番号】特願2013-134741(P2013-134741)

【国際特許分類】

A 6 1 K 8/97 (2006.01)

A 6 1 K 8/33 (2006.01)

A 6 1 Q 19/00 (2006.01)

【F I】

A 6 1 K 8/97

A 6 1 K 8/33

A 6 1 Q 19/00

【手続補正書】

【提出日】平成28年6月24日 (2016.6.24)

【手続補正 1】

【補正対象書類名】特許請求の範囲

【補正対象項目名】全文

【補正方法】変更

【補正の内容】

【特許請求の範囲】

【請求項 1】

バニルルアルキルエーテルを化粧料全量に対して 0.1 質量%～1 質量%と、トウガラシ抽出物を化粧料全量に対して固形分として 0.001 質量%～0.1 質量%とを含有する温感化粧料において、バラ科の植物抽出物を含有することを特徴とする、温感化粧料。

【請求項 2】

前記バラ科の植物が、アロニア属アロニア・メラノカルパ (Aronia melanocarpa) 及び／又はキイチゴ属オニイチゴ (Rubus ellipticus) であることを特徴とする、請求項 1 に記載の温感化粧料。

【請求項 3】

バラ科の植物抽出物を化粧料全量に対して、固形分として 0.0001 質量%～1 質量%含有することを特徴とする、請求項 1 又は 2 に記載の温感化粧料。

【手続補正 2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0003

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0003】

一方、即効性の高い温感剤としてトウガラシ抽出物が知られており、バニルルアルキルエーテルと併用した温感化粧料も知られている（例えば、特許文献 3 を参照）。しかしながら、トウガラシ抽出物の温感ピークの時間とバニルルアルキルエーテルの温感効果が最大になる時間にまだズレが存するため、温感の中だるみが生じるという課題が存した。

【手続補正 3】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0008

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0008】

＜本発明のバニリルアルキルエーテル＞

本発明の温感化粧料は、必須成分としてバニリルアルキルエーテルを含有することを特徴とする。バニリルアルキルエーテルを構成するアルキル基としては、炭素数1～4のものが好ましく、例えば、バニリルメチルエーテル、バニリルエチルエーテル、バニリルプロピルエーテル、バニリルイソプロピルエーテル、バニリルブチルエーテル、バニリルセカンダリーブチルエーテル、バニリルイソブチルエーテル、バニリルターシャリーブチルエーテル、バニリルシクロプロピルメチルエーテル、バニリルシクロブチルエーテル等が具体的に好ましく例示できる。この内、バニリルブチルエーテルは、既に市販されておりそれを用いることもできるし、バニリルアルコールを塩化チオニルなどのハロゲン化剤でハロゲン化した後、水素化ナトリウムなどのアルカリ存在下対応するアルコールと縮合させて製造し、使用することもできる。バニリルアルキルエーテルの含有量は、化粧料全量に対して、0.1質量%～1質量%であり、好ましくは0.1質量%～0.5質量%である。これは、少なすぎると温感効果が弱くなり、多すぎるとバニリルアルキルエーテルの刺激性が強くなり使用性が低下するからである。本発明の化粧料においては、バニリルアルキルエーテルを唯一種含有させることもできるし、二種以上組み合わせて含有させることもできる。好ましい形態は、バニリルブチルエーテルを単独で含有する形態である。

【手続補正4】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0010

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0010】

本発明のトウガラシ抽出物としては、ナス科トウガラシの果実の乾燥物を有機溶剤で抽出したもの又はその溶剤除去物が好ましく、有機溶剤としては水に可溶なものが好ましく、エタノールやイソプロパノール、1,3-ブタンジオールなどのアルコールが特に好ましい。抽出は植物体に1～10倍量の溶媒を加え、室温であれば数日間、沸点付近の温度であれば数時間浸漬すればよい。必要に応じて濾過して不溶物を取り除いた後、所望により減圧濃縮などにより溶媒を除去することができる。本発明の温感化粧料における、トウガラシ抽出物の含有量は、化粧料全量に対して、固形分として0.001～0.1質量%であり、好ましくは0.005～0.05質量%である。これは、少なすぎると即時的な温感効果が発揮できない場合があり、多すぎると刺激感が強すぎる場合があるからである。